



三代に受け継がれる「友愛」

—— 鳩山由紀夫元総理に聞く日中友好と青少年交流 ——

新年早々、「中国人の日本語作文コンクール」と「日中ユースフォーラム」に大変お世話になりました鳩山由紀夫先生を訪問し、日中友愛、特に青少年交流等について先生のお話を伺いました。



第21回「中国人の日本語作文コンクール」受賞作品集を掲げる鳩山由紀夫元総理

●「友愛」の理念について

「友愛」の理念は、鳩山一郎先生（1883-1959）が、公職追放中の1946年頃、父はオーストラリア貴族で在日オーストラリア・ハンガリー国代理公使、母は日本人青山光子という令明高き政治哲学者であるリヒャルト・クーデンホーフ＝カレルギーの“Totalitarian State against Man”（全体主義国家と人間の対立）を『自由と人生』と題し翻訳紹介し「友愛思想」に深く打たれました。1953年当時、日本は戦後の混乱をどう克服すべきか、国家としての再建や将来について、日本の為政者には難題が山積していたのです。鳩山先生はこれを原点とした友愛思想、友愛革命、友愛社会を提唱し、友愛こそ日本再興のテーゼであり、友愛を原点とした青年運動の展開はこれからの日本発展の原動力であると友愛青年同志会を結成し、自ら会長となり10万人の会員を主導し、当時の日本の政財界はじめ、その思想や文化に大きな影響を与えました。政治家としては初代自由民主党総裁に就任、内閣総理大臣として日ソ国回復、国連加盟等 友愛思想に基づく数多くの政治的懸案を解決、戦後日本の躍進に大きな貢献をされました。

友愛運動の理念であり、人間の人格の尊厳を基調とし

での「相互尊重・相互理解・相互扶助」友愛三原則を活動のベースとして名称変更を行いながら友愛は活動を続けています。

二代目鳩山威一郎先生(1925-2006)は、外務大臣(1976-1977、1986-1987)として父の理念を継承。日本友愛青年協会(現・公益財団法人友愛)の会長を務め、国際交流を推進しました。具体例として、1978年の日中平和友好条約署名に貢献し、友愛をアジア外交に実践。また、友愛アジア青年指導者セミナー(1970年代)への参加支援を通じ、アジア諸国との相互理解を促進。冷戦下で「友愛3原則」を外交指針としました。

三代目鳩山由紀夫先生(1947-)は、民主党代表・首相(2009-2010)時代に「友愛外交」を掲げ、東アジア共同体構想を提唱。2009年11月シンガポール講演で「自分の自由と他者の尊厳を尊重する自立と共生」を強調し、経済・環境・防災・海洋協力の4領域を提案しました。

●「友愛」の理念の継承、特に中国の関連について

これらは「友愛外交」の実践で、中国関連の具体事例として、一帯一路積極参加支持表明(2023年):北京フォーラムで「日本は一帯一路に積極参加すべき」と発言、150カ国超のプロジェクトを評価し、日中協力拡大を提唱。日中国交正常化50年集会講演(2022年):対話による平和解決を訴え、中日協力重要性強調。

特に、抗日戦争勝利70周年(2015年)・80周年(2025年)式典出席したことです。2025年は習近平主席出迎えを受け、鳩山由紀夫先生が2025年9月3日に中国の抗日戦争勝利80周年記念式典に出席したことは、「友愛」理念の重要な実践です。この出席は歴史を正視し、日中和解を促進する「自立と共生」の精神を示します。習近平主席の「軍国主義者と一般日本人を区別」する演説を評価し、過去の侵略事実を認めつつ、未来志向の東アジア平和構築に貢献。批判を受けながらも、鳩山先生の「友愛外交」の一貫性は、自由・平等に基づく博愛を実践する哲学の現代的体现です。

昨年11月7日の国会で、高市首相は台湾有事について「武力行使を伴う場合、存立危機事態になり得る」と述べ、中国側から強い反発を招きました。鳩山先生はXで「高市首相の間違い」「道を踏み外した発言」と非難し、日中関係悪化の責任を指摘。経済損失(ホテルキャンセルや公演中止)を挙げ、「また孔子は『過ちて改めざる、是を過ちと謂う』とも述べている。急ぎ改めることだ。」とも書きました。この言葉の意味は「失敗することが過

ちなのではなく、その失敗を反省して改めないことが本当の過ちである」となります。

●青少年交流は「友愛」の理念の末永く継承し、世界平和に重要な一環

鳩山由紀夫先生の友愛理念を実践する草の根交流の一例を挙げます。長年にわたり、日中友好を推進し、特に「中国人の日本語作文コンクール」を支持してきました。このコンクールは日本僑報社が主催し、中国の日本語学習大学生を対象に日中相互理解を促進する重要な活動です。累計6万人以上の応募が生まれ、受賞作は書籍化されて交流の架け橋となっています。

鳩山由紀夫先生は受賞者の訪日時に面会し、学習者のモチベーションを高め、日本語学習に励みされました。

受賞者と日本人の若者との、若者同士の対話「日中ユースフォーラム」交流イベントなどで、鳩山由紀夫先生より励ましのビデオメッセージをいただき、両国青年の「感動の共有」が進み、持続的な友好基盤が築かれています。

日本と中国の両国青年は、友愛の理念を学び継承し、両国の友好と世界の平和に貢献していきたいと鳩山由紀夫先生が願っています。



鳩山元総理、早稲田大学楊達教授と



中友会会員による
中国滞在体験談

私の中国物語

「私の中国物語」その①

「香香」と中国と私 —また会える日まで—

会社員 高畑 友香



2023年3月、雅安パンダ基地にて。公開は1週間遅れたものの、シャンシャンのパネルは既に設置されていた

パンダを初めてかわいいなと思ったのは2008年、父の駐在で北京に滞在している時のことだった。北京動物園にいる赤ちゃんパンダが、庭の中を走り回り、木によじ登ったと思ったら、うまく登れずに木から落ちて尻もちをついたり、とにかくよく動く様子に目を見張った。それまで見たことのあるパンダは皆おそらく大人のパンダで、動きがなかったので、パンダってこんなに活発に動くんだと感心した。

2009年、高校に進学するタイミングで日本に戻り、その後パンダ熱は冷めていた。高校、大学と進学し、中国語の勉強は細々と続けていたが、パンダのことはほぼ忘れていた。しかし、転機が訪れた。2017年6月12日、上野動物園で待望の赤ちゃんパンダが誕生した。シャンシャンである。テレビでは日々大きくなっていくシャンシャンの様子が放映された。最初はエイリアンのようだったシャンシャンがだんだんふっくらしてきて、うっすらピンク色のふわふわの毛が生え、キラキラした目が開

き、口角は少し上がり微笑んでいるかのように見えた。お母さんのシンシンが大好きで甘えるような仕草や、飼育員さんにメジャーで身長を測られる様子、全てがかわいくてかわいくて、毎日のようにSNSで画像を漁った。

上野動物園が赤ちゃんパンダの名前を募集していると聞いた時、急に応募しようという気になり、上野動物園のホームページを開いた。名前と名前の由来を書く欄があり、由来の欄には「子供の頃、中国でお手伝いさんと呼ばれていた名前が香香だった。」と記入した。一歳から3歳のことなので、私自身の記憶にはなく、父や母から聞いていたエピソードだった。数ヶ月後、まさか本当に香香になると思わなかったのが、名前が決まった時は嬉しいよりも驚きが大きかった。他にも名付け親となった人はたくさんいたため、名付け親だという証明は応募時のホームページのスクリーンショットしかないが、名付け親の一人と自認し、更に愛着が芽生えた。そこから、上野動物園の年間パスポートを購入し、上野動物園に通い詰めた。世の中はシャンシャンフィーバー真っ只中で、2時間並んでも2分見られるかどうか。しかもまだ赤ちゃんなので、寝ていることや、顔が見えないこともしばしばあった。しかしそれでこそギャンブルのような中毒性があり、何度も何度も暇があれば上野動物園へ通い、列に並んだ。園内では限定のグッズを買いに行き、香香を題材に書いたOL川柳も投稿した。「持て余す母性を全てシャンシャンに」。自分の気持ちをそのまま表したような、何の捻りもない川柳だったが、世がシャンシャンフィーバーだったこともあり、なんとこれが入選し、イラストをつけたカレンダーにまでしていただいた。狂ったようなときめきと行動力、シャンシャンは私の推しであり、この行動は今で言う推し活だったと思う。

2019年、今度は自分自身の駐在で10年ぶりに中国へ戻った。3回目の中国滞りで、前回、前々回に滞在した北京でも広州でもなく、住んだことのない上海。その上、

仕事で駐在ということもあり、楽しみ半分、不安半分だった。シャンシャンとは遠距離になり、見に行くこともしばらくなかった。赴任の一年後にコロナウイルスが勃発して、思うようにいかないこともたくさんあったが、上海では日本人中国人含め色んな人に出会い、公私ともに大事な仲間がたくさん増え、更に一段中国という国の存在が私にとって大きく大事な存在となった。

そして2023年、無事に4年間の上海駐在を終え、4月について本帰国となった。2022年末まで続いた厳しいゼロコロナ政策が終わりを迎えた頃、大好きなシャンシャンが当初の予定よりかなり遅れて中国に戻ってきた。シャンシャンのいる雅安パンダ基地は、四川省の省都・成都から車で二時間ほどと行きづらい場所にある。しかし、他のどこよりも行きたい場所だったので、2023年3月末に満を持して会いに行った。ところが、シャンシャンの繊細な性格が考慮され、予定より公開時期が一週間遅れてしまい、パンダ自体はたくさん見ることができたが、残念ながら雅安でのシャンシャンとの再会は叶わなかった。パンダ基地の職員にシャンシャンは元気かと尋

ねると、彼は「日本人か？」と尋ねた後、「元気じゃなかったら公開を検討することだってしないから、元気に決まっているじゃないか。」と四川訛りの中国語で答えてくれた。

こうしてまたもや、私とシャンシャンは遠距離になってしまった。しかし、ゼロコロナ政策も終わり、日中の行き来は今までよりもずっとしやすくなった。いつかまた会いに行きたいと思う。その時はシャンシャンも中国でお母さんになって、私は彼女の子供を見ることであるかもしれない。

香香、5年間、暖かいときめきと熱狂をありがとう。近くにいても離れていても、大好きだよ。またどこかで会おうね。

高畑 友香 (たかはた ゆか)

1993年千葉県生まれ。一歳になる前に父の仕事の都合で中国広州へ。3歳になる年に帰国。その後小学校3年時に再び中国広州、その後中国北京に移動し、中学3年時まで7年間中国に滞在。お茶の水女子大学文教育学部人文科学科卒業後、大手服飾資材メーカーに就職し、主に海外営業支援に従事。3年目まで都内で勤務したのち、4年目より仕事で中国上海に4年駐在。現在は帰国し、東京都内に在住。

「私の中国物語」その②

あたたかい思い出のワンタン

銀行員 南沙良

私はワンタンが大好きです。ですが中国に留学する前まではワンタンはあまり好きではなかったし、餃子の方が好きでした。留学中のある出来事から、ワンタンは私にとってかけがえのない思い出のたくさん詰まった料理になったのです。

私は大学3年生の秋から上海にある復旦大学に半年間交換留学していました。当時私の中国語能力はかなり低く、授業にもついていけずに日々落ち込んでいました。ご飯を買うことすらままならず、これではいけないと思い勉強する時間を増やすことにしました。毎日授業が始まる二時間前に教室に行き、誰もいない教室で発音の練習などをしていました。授業が始まる二時間も前なので当然クラスメイトは誰も来ることはありませんでした。ただ、清掃のおばさんが私の勉強中必ず教室に入って来て掃除をしていました。

最初、そのおばさんに会っても自分の中国語に全く自信がなく挨拶も怖くてできませんでした。失礼な事をしているなと思いつつ、恐怖心から全く話さないまま一カ月程が経ちました。

一カ月も経つと、毎日の自習の成果が授業にもついていけるようになり多少は自分の中国語に自信を持てるようになりました。そこで勇気を出して、清掃のおばさんに声をかけてみました。毎日掃除をしてくれてありがとう、本当はいつも挨拶したいと思っていただけ勇気がなくて挨拶することができなかつたとおばさんに言いました。するとおばさんは私がいつも勉強を頑張っていた事、発音の練習をしている様子から私が自信がない事をわかっていてと言いました。最初の頃に比べたら随分話せるようになったね、と褒めてくれました。

それから毎朝、清掃のおばさんとおしゃべりをするの

が私の日課となりました。おばさんはいろんな話をしてくれました。中でも一番多かったのは息子さんの話でした。息子さんは私と同一年で、今は遠くの大学に通っているため食事をきちんととっているか心配でたまらない。息子さんに大好きなワンタンを作ってあげたいけど、遠いからどうすることもできずにやきもきしている、と言いました。

ワンタンはおばさんの得意料理で餡には格別のこだわりを持っており、息子さんに食べさせるときは二日かけて餡を作るんだよと教えてくれました。私はその話を聞くまでワンタンがそんなに手間のかかる料理だとは知りませんでした。私が今まで出会ったワンタンは具は少ししか入っておらず、ほぼ皮のペラペラなものだったからです。それをおばさんに伝えるとそんなものはワンタンじゃないととても驚いていました。

そんなたわいもない話を続けていたある日、おばさんが大きな袋を持って教室の中に入ってきて、その袋を私に渡しました。なんとおばさんは私のためにわざわざワンタンの餡を作って持ってきてくれたのです。とても一人では食べきれない量の餡を作って私にくれました。まさか作って持ってきてくれるとは思わず私はとても驚きました。おばさんはどうしても私に自分のワンタンを食べさせたかった、また毎朝私と話してるうちに娘ができたみたいで嬉しかったから何かできる事をしてあげたいと思い作ってきてくれたのだと言いました。

私は感動で胸がいっぱいになりました。授業が終わった後おばさんに教えてもらった通りにワンタンの皮を買い、友人達と餡を包んで食べました。今まで私が思っていたワンタンとは全くの別物で、本当に美味しく感動

しました。味にも感動しましたが、なによりもおばさんが私のことを思って私のために作ってくれたことが本当に嬉しかったです。

それから留学期間終了までの数カ月間、おばさんは定期的に私にワンタンの餡をたくさん作ってきてくれるようになりました。留学中の悩みもおばさんに相談するようになり、私にとっても母のような存在でした。

そして最後の授業の日におばさんに今までの感謝の気持ちを込めてプレゼントを渡しました。おばさんは清掃でいつも手が荒れていたのでハンドクリームのセットをプレゼントしました。おばさんは今までこんないいものもらったことないと泣いて喜んでくれました。

私もおばさんとの別れが辛く、泣いてしまいました。また会いに来るからと約束をしてお別れをし、帰国しました。

今でも日本では中国の人たちに対して誤解している人たちが多くいます。確かに反日感情を抱いている方も中にはいると思いますが、大半は本当にあたたかくて良い人たちばかりというのを多くの方に知ってほしいです。

私は中国に対してネガティブなイメージを持っている人に出会うと毎回この清掃のおばさんの話をするようにしています。大半の人が驚き、イメージが少し変わったと言ってくれるようになりました。私自身大きな影響力はありませんが、日本人が中国に対して抱くイメージを少しずつでも変えていくのが私の使命であるのではないかと感じています。

南沙良 (みなみ さら)

(株)愛知銀行渉外担当。1995年愛知県長久手市生まれ。同志社大学商学部在学中に2015年9月より上海復旦大学へ交換留学。帰国後2017年3月に同志社大学卒業、同年4月(株)愛知銀行入行。



2018年、浙江省の友人宅にて

「私の中国物語」その③

パンダが紡ぐ日中の平和友好関係

大学院生 山本 可成



幼いときに見に行った上野動物園のシンシン。
日中平和のシンボルであるパンダの可愛さは
人々の心を癒す

今年2022年は、1972年に調印された日中共同声明を機とする日中国交正常化から50周年を迎える。この節目に、当作文を記す機会を頂けるのは大変嬉しく、一日本国民として心から祝意を表するとともに、今後の日中関係の増々の発展を願うばかりである。そんな50年は日本と中国が紡いできた2000年を超える歴史の中では一コマに過ぎない。しかし、一コマといえど大変大きな意味を持つ年月である。なぜなら、先の大戦でのつらい過去を乗り越え、未来の、次世代の両国の子孫が笑って手を取り合い、互いに協力して平和と繁栄を目指す、改めての決意であり、その実行を重ねたものだからである。その重みを大切にするとともに、私自身も次世代に繋げていきたい。

そんな私には、思い起こせば、中国がいつも側にいたように感じる。小学生の頃から、三國志や史記を読みふけていたうえに、中学高校生時には中国を旅行した。

大学生時代には、政治学を専攻し、中国の政治や経済、社会について学んでいた。その中で、先端技術を活用した国家運営やチャイナイノベーションが生まれる理由、共同富裕などを間近で学び、日本に活かしたく、新型コロナウイルス感染症の影響でオンラインではあるものの、清華大学の公共管理学院への交換留学生となった。やはり中国を学ぶことは奥深く、コロナウイルスが終息し、機会ができるならば北京を訊ねてみたいものである。さておき、より大きなレベルで考えると、私を含めた日本人が中国を感じるのは、あの白と黒の愛くるしい動物を見た時である。そう、パンダである。今でこそ日本に13頭もいるものの、その始まりは、日中国交正常化だといえる。

1972年、田中角栄首相が日本の総理大臣として初めて訪中を果たし、周恩来首相と共に、日中共同声明が調印された。それを祝して、中国国民から日本国民へ雌雄一対パンダが贈られた。このパンダが、日本国民なら誰もが知るランランとカンカンである。これを機に、パンダは日中友好のシンボルとなったのである。実際、私の祖父母も、来日直後のランランとカンカンがいる上野動物園に見に行ったが、何時間も並んで数十秒しか見ることができないくらいの熱狂ぶりだったそうだ。その後も友好の証として、中国からフェイフェイ、ホァンホァンが贈られ、その子供のチュチュ、トントン、ユウユウもパンダ人気に拍車をかけたという。ユウユウは北京動物園のリンリンと交換され、トントンと番になっただけだが、これも父母世代では記憶によく残っているようである。時が進むにつれ、中国がワシントン条約に加盟したことにより、パンダの贈呈はなくなってしまったが、2000年代になり、レンタルという形でメイメイがアドベンチャーワールドに来日した。まさに日中パンダ友好の新時代の幕開けである。繁殖貸与方式であることが作用し、日本と中国はパンダ研究でも密なる親睦を深めた。パンダという希少動物を保護し繁殖させるという崇高な共通理念から、多くのパンダが上野動物園、アドベンチャーワールド、神戸市立王子動物園に来日し、10頭を超えるパンダが日本で誕生している。このように、日本

においてパンダは特別な存在となり、中国をイメージする際のシンボライズとなっている。

昨今においても、パンダ人気は衰えることはない。2020年の東京五輪に続く、2022年の北京五輪の公式キャラクターはパンダであるビンドゥンドゥンだ。この冬季五輪は、寒い日本の冬を暖めてくれたのは事実で、とりわけビンドゥンドゥンの人気は凄まじいものだった。私だけでなく、周りの友人も可愛いと絶賛し、言わずもがなビンドゥンドゥンの話で盛り上がった。新型コロナウイルスの影響で、日中ともに五輪の開催に苦労したのは事実である。しかし、両者は互いに尊重・協力しながら、この困難をものともせず大成功に導いた。日中両国は平和を真に願うからこそ、皆が顔を下に向け辛い思いをしていた時に、スポーツを通した平和の祭典を安全に開催し、世界の人々に感動を与えた。このように東京から北京へと平和の祭典が紡がれ、そのキャラクターがパ

ンダであるとは、なんとも不思議な縁のように感じる。また、50周年を迎える年に、日中共同声明の内容の一つである平和五原則と根本的な理念を同じくする五輪というイベントが行われたことは、私は偶然とは思えない。日中人民の絶え間ない努力によって紡がれた結果の賜物だと思う。

最後に、2021年、日本に2頭の赤ちゃんパンダが誕生したことを祝す。暁暁と書いてシャオシャオ、蕾蕾と書いてレイレイと呼ぶ。2頭の名前を合わせると、明るい夜明けから未来へとつながるという意味になる。まさに日中国交正常化の理念であり、両国の関係そのものだろう。私たち若い世代が、この重みをしっかりと自覚して未来へと繋げていきたい。

山本 可成 (やまもと よしなり)

1999年京都市生まれ、京都市育ち。大学在学中交換留学生として、中国・清華大学公共管理学院に留学した。現在、日本と中国のビジネスを結ぶ懸け橋となるべく、経営学を研究している。

「私の中国物語」その④

北京の風に吹かれて

プロデューサー 芦田 園美

6月の爽やかな風が吹くと、北京を思い出す。目を閉じると、朝、ファンさんと出かけた紫竹院公園の情景が浮かんでくる。細い竹の間を抜けて吹いてくる風、笹の葉が触れあう音。蓮の花が咲いている池の畔から流れてくる歌声。柳の枝をさわさわと揺らす風に吹かれながら、私は大きく息を吸い勇気を出して話しかけた。

私が中国に短期留学に行きたいと言い出した時、家族は賛成してくれた。職場の仲間に54歳で初めて語学留学に行くことを伝えると、驚きながらも応援してくれた。2018年6月、夏休みと有休を合わせて10日間しかない留学に、私は迷わずホームステイを選んだ。短期間だからこそ毎日生きた中国語に触れどんなことでも吸収したかった。

しかし、記念すべき短期留学一日目の夜、ホストマザーのファンさんと私は、リビングのソファに並んで座り、途方に暮れていた。私はファンさんの中国語が速くて聞

き取れず、ファンさんは日本語が出来ない。中国語学習歴4年、中検四級の私が気合いだけで北京まで来てしまった。微信でメッセージを送り合い翻訳したら会話は成立するが、それでは留学に来た意味がない。筆談しかないといい百均で買ったホワイトボードを取り出し「明日は午前中が中国語の授業なので8時に起床」と書いて指差した。

翌日からはファンさんの中国語に慣れたようで、徐々に聞きとれるようにはなったが、私から積極的に話すことが出来なかった。話す前に単語や語順を考えてしまい、結局知っている単語と身振りでしか伝えることが出来なかったからだ。ファンさんは私の単語を並べただけの質問でも意図を汲み取り、的確に答えてくれ、私が話さなくても様子を見て「疲れただろう。少し休みなさい」と母親のように親身になってくれた。十代で母親を亡くした私にはその心遣いが懐かしく有難かったが「謝謝」よ

りも深い感謝の気持ちを言葉で表現できないことがもどかしかった。

あと一步の勇気が踏み出せずにいた時、ファンさんが私の肩をそっと叩き「あなたは聞いてこないけど、私の夫は10年前に亡くなった」。拳骨で胸を叩き、「心臓の病気で」とゆっくりと語り始めた。「私は満州族で、祖父は故宮で働いていた」。軽い驚きと共に、リビングに満州族の衣裳を着たファンさんの写真が飾ってあった事を思い出した。兄弟姉妹が何の仕事をしているかも話してくれた。私は一回聞いただけで理解できたことに驚きながら、ファンさんが自分のことを沢山話してくれたことが嬉しかった。私も自分のことを話してみたくなった。伝えたいという強い気持ちを込めれば通じるのではないかな。単語や語順や発音や声調が違ってても恐れず話してみようと思った。

次の朝、いつものように一緒に紫竹院公園に行き、ファンさんの仲間と音楽に合わせて踊った。公園内のベンチに座ると涼しい風が吹いてきた。今だ！思い切ってファンさんに私の住んでいるところや家族のことを、ゆっくり、大きな声で話した。私の話を聞きながら聞いていたファンさんが「どんな家にすんでいるの」と聞いた。私はホワイトボードに自宅の間取りを書き、家族と猫の写真も見せて指差しながら説明した。初めて会話が途切れず続き、言いたいことも伝わったという手ごたえを感じた。「日本の桜はきれい？」とファンさん。「とても美しい。日本人はみんなお花見をする」「日本の桜を見たい」「私もファンさんと一緒にお花見をしたいな」。そう答え、「はあー」と目を閉じふたりでお花見をしている姿を想像した。しばらく幸せな沈黙があり、ゆっくり目を開けると何かが変わったように感じた。気持ちも軽くなっていた。「一緒に写真を撮ろう」とファンさんを誘った。新しい風に吹かれながら、私は髪を整え自撮り棒をあげてファンさんに寄り添いシャッターボタンを押した。

その後は、何気なく思ったこともファンさんに言えるようになり、気負わずに話ができるようになった。半面、余計なことを言ってしまうたり、ニュアンスを正しく伝えることが出来ずに勘違いさせてしまうこともあり、それはそれで笑い話になった。

最終日。ファンさんが空港行きのバス停まで送ってくれた。私が「帰りたくない」と言うとファンさんは肩をパンと叩いた。それ以上は言葉が出なかった。ファンさんが空を見上げた。私も見上げると青空に雲が浮かんでいた。爽やかな風と共にバスがやって来た。バスに乗りドアが閉まったとたん、私は号泣した。子どものように顔をグシャグシャにして泣いた。窓の向こうのファンさんの苦しそうな表情が遠ざかる。いちばん言葉が通じなかったファンさんといちばん気持ちが通じ、かけがえのない友達になれた。中国でできたはじめての友に、また会えるだろうか。日本に来てくれるだろうか。花が大好きなファンさんとお花見に行きたい。そして、日本の風に吹かれながらファンさんと語り合いたい。



2018年、北京の紫竹院公園にてファンさんと

芦田 園美 (あしだ そのみ)

1964年千葉県生まれ。1986年武蔵野美術大学造形学部芸術デザイン学科卒業。同年テレビ番組制作会社に入社、バラエティ、情報番組、ドラマ、CMなどを制作。現在は日テレアクセス勤務。2015年から息子が通う清真学園の土曜講座で学生と一緒に中国語を学ぶ。2016年から毎年、全日本中国語スピーチコンテスト千葉県大会に出場。北京のファンさんとは今でも微信で連絡を取り合っている。